



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3806号 2017.7.29 発行

### 水前寺清子、「三百六十五歩のマーチ」が障害者スポーツ応援ソングに



サンケイスポーツ 2017年7月29日  
自身の名曲「三百六十五歩のマーチ」が応援ソングに決まり笑顔を見せる水前寺清子

歌手、水前寺清子（71）が28日、東京都内で行われた「スポーツ・オブ・ハート2017」の応援ソング発表会見に出席した。

1968年に発表された自身の名曲「三百六十五歩のマーチ」が応援ソングに決定。「三百六十五歩のマーチ2017」のタイトルで、水前寺のほかに愛乙女☆DOLLらアイドルグループ、シンガー・ソングライターのTEE（34）らが参加する。水前寺は「みんなのおばあちゃんになった気持ちで、皆さんのパワーに負けないよう頑張りたい」と誓った。

今年で5回目となる同イベントは障害者スポーツへの支援の輪を広げるプロジェクトで、10月14、15日に東京・代々木公園イベント広場で開催。

### 障害の有無関わらずアートを楽しもう 創作ワークショップ



朝日新聞 2017年7月28日  
イベントの最後に記念撮影をする参加者=長崎市千歳町

障害のある人もない人も一緒に、のびのびとアートを楽しもう——。長崎市千歳町のチトセピアホールで先月、創作ワークショップ「ツナグ・アートワークス」があった。今年で3回目。参加者はホールの広い空間をアトリエに、思い思いに筆を走らせた。

障害者の社会的自立を支援するNPO法人「ツナグ・ファミリー」が同市江戸町の事務所で隔週の土曜日に開くイベントの拡大版。代表理事の城島薫さんは「障害について、もっとたくさんの人に知ってもらいたい」と活動の狙いを話す。

6月3日のワークショップでは、ホールに広げられたブルーシートの上で、参加者は多彩な絵の具を使って幾何学模様やメッセージを描いた。一心不乱に紙に向かう人、次から次へと何枚も描く人——。決められたテーマや制限はなく、一人ひとりが描きたいように描いた。

高齢者施設で働く加島健さん（43）は「たくさん色が用意してあったので全部の色を

使いたいなと思った」と、アジサイを色彩豊かに描いた。「仲間たちと一緒に描けて楽しかった」と初参加の感想を笑顔で語った。

ワークショップには、活水女子大文学部現代日本文化学科で「共生社会」について学ぶ学生8人も参加。過去のワークショップで障害者が描いた絵をもとに制作したTシャツやクリアファイル、絵はがきを会場で販売した。売り上げの5%が原画作者に還元される仕組みという。古賀弥生教授は「ささやかですが、障害者の経済的自立や、社会的なつながりづくりのお手伝いができれば」と話す。

タイからの留学生トガ・ジラットチャヤーさん（19）は「タイにもボランティアはあるけど、日本のほうが障害者との距離が近い。うまくしゃべれない人でも、絵を通してならば、考えていることを伝えられるので、とてもいい活動だと思った」。障害者が描いたカラフルでエネルギー溢れる作品を、うれしそうに携帯電話のカメラに収めていたトガさん。「私より上手。感動しました」と、はじけるような笑顔で話していた。（森本類）

## 共に生きる明日へ 相模原殺傷から1年 暗い人生じゃない 県手をつなぐ育成会・依田



雍子会長 /神奈川 毎日新聞 2017年7月28日  
障害を特別扱いしない教育を目指して提言してきた依田雍子  
さん＝横浜市内の「県手をつなぐ育成会」事務所で  
分け隔てない教育を 依田雍子会長（75）

事件直後、「障害者を抹殺する」という植松聖被告の狂信ぶりが取りざたされた。「『優生思想』はけしからん」「植松被告は許せない」。そう訴えることは簡単だが、私にはためらいもあった。出生前診断の是非が気にかかっていたからだ。

出生前診断は、私たち障害がある子どもの親が、ずっと議論を棚上げしてきたテーマでもある。これまで子育てに大変苦勞して生きてきた。何が何でも出産しろと強要できるのか。そう考えれば、出生前診断の是非について、意見を述べることはできずにいた。

## 「偏見ない職場で働きたい」 鴻巣で障害者対象の合同企業面談会

産経新聞 2017年7月29日

来年4月から障害者の法定雇用率が引き上げられるなど障害者採用の機運が高まる中、障害者向けの合同企業面談会（チャレジョブセンター主催）が28日、鴻巣市市民活動センター（同市本町）で行われた。27企業・団体が障害や難病を持った就労希望者約140人の質問に答えた。

埼玉労働局によると、県内の平成28年度の障害者の雇用率は1・93%で5年連続増加。就職件数も3958件（前年度比419件増）と7年連続上昇しているという。

面談会に参加した統合失調症の加須市の男性（27）は「どんな病気を持っていても偏見を持たず公平に見てもらえるところで働きたい」と希望を語り、食品会社などを見て回った。

5年前に職場のストレスで強迫神経症を発症したという久喜市の男性（39）は「トイレが近いので、自由に行かせてもらえると助かる」と話し、金属部品を扱う会社のテーブルに足を運んだ。

障害者と面談したICT（情報通信技術）サポートサービス会社「キューアンドエー」の小松徳幸・鴻巣オペレーションセンター長は「障害者の方に叱責するような注意をしない。『これ』や『あれ』などのあいまいな表現を使わないなど配慮している」と職場の環境を説明。「弊社で働ける方はぜひ採用させていただきたい」と意欲をみせた。

障害者雇用促進法は障害者の雇用率を定めている。現在は従業員50人以上の民間企業で2%などとされているが、来年4月に0・2%引き上げられる。

## 水彩画展 子どもたち、優しいタッチで 女性障害者が描く 31日まで芦屋 /兵庫



毎日新聞 2017年7月28日

印南里香さん(右)の優しい雰囲気が漂う水彩画展(左は母直子さん)＝兵庫県芦屋市の市立芦屋病院で、遠藤哲也撮影

知的障害のある芦屋市の印南(いんなみ)里香さん(24)が幼い女の子らをモチーフに描いた水彩画展が、芦屋市朝日ヶ丘町の市立芦屋病院4階ギャラリースペースで開かれている。31日まで。

里香さんには発達の遅れがあり、中学2年生だった14歳で療育手帳を取得、障害児学級に通った。絵が好きになったのも、この中学生時の宿題の絵日記がきっかけだったとい

う。

## なぜ“虐待入院”と名付けたか



NHK ニュース 2017年7月28日

病気もけがもしていない子どもたちが入院を続けている異常な事態が全国の病院で起きています。小児科医のグループの調査でその数は去年までの2年間で少なくとも356人。自宅に戻ると再び虐待を受けるおそれがあるほか、児童養護施設などの施設にも空きがなく、行き場を失ってしまっているのです。私たち取材班はこうした状況を「虐待入院」と呼び、その実情や背景をニュースや番組でお伝えしました。

放送後、さまざまな反響があり、その中には「“虐待入院”ってNHK独自の言葉？」など呼び方に疑問を投げかける声もありました。私たちはなぜ“虐待入院”と名付けたのか。そう呼ぶしかない、医療現場や子どもたちが置かれている厳しい現実があったのです。(社会部 村堀等記者・ネットワーク報道部 野田綾記者)

### 放送後の反響に驚く

「退院できないお子さんに、何かできることはないのでしょうか」

「あまりにもむごいことです。何とかならないのか、どうにかできないのか…」

7月20日の「ニュース7」や「クローズアップ現代+」の放送後、NHKには視聴者の方からさまざまな反響が寄せられました。メッセージの多くは子どもたちが置かれた状況に心を痛み、何かできることはないか真剣に考えはじめたというご意見でした。

### “虐待入院”って変!?

その一方で「虐待入院」という呼び方を疑問視する声も寄せられました。

「虐待入院ってNHK独自の言葉？」

「病院で虐待しているみたい…」

実は私たち取材班でもこうした実態をどう呼ぶべきなのか、何度も議論しました。

「社会的入院」「保護入院」はすでに高齢者や精神障害のある人などを対象に使われている言葉で、誤解を招くおそれがありました。「養育入院?」「避難入院?」。アイデアは浮かんで消え…の繰り返しでした。

そうしたなか「この問題は“虐待入院”と呼ぶしかないのでは」という意見が出ました。あえて強い言葉を使わなければ、厳しい現実には伝わらないという主張でした。現場ではどのような実情があるのでしょうか。

### 子どもを見たら虐待を疑え!

埼玉県立小児医療センターには夜間早朝問わず、救急車で子どもたちが運ばれてきます。ER・救急治療室では



医師や看護師が子どもたちのけがの状態や症状を確認。子どもを診察しながら、付き添って来た親にけがをしたときの状況を聞き出します。けがの状況がはっきりせず、説明に矛盾を感じればソーシャルワーカーに相談します。

ER担当の植田育也医師は「私たちは『子どもを見たら虐待を疑え』という意識で治療にあたっています。あまりにも虐待の疑いがある子どもが多く、それぐらいの意識がなければ見過ごしてしまいます。結果的に虐待でなければそれでいい、親に恨まれることを恐れている子どもの命は救えません」と話しています。

### 呼吸が十分できない赤ちゃん

私たちが病院内で取材をしていた際、呼吸が十分できなくなった状態で搬送された赤ちゃんが高度治療室に入院していました。治療を受けて回復した赤ちゃんを自宅に戻すかどうか、医師やソーシャルワーカーなどによる『虐待対応チーム』が話し合っていました。1回目の会議ではネグレクトなど虐待による症状だとははっきり確認できなかったことから、地域で見守りを続けながら自宅に戻すことが可能と判断し、親に退院できる旨を伝えようと電話で連絡をしました。



### 退院を喜ばない親

しかし何度かけても親は電話に出ず、電話を折り返してきたのは1日半経ってからでした。親は翌日、子どもの面会に来ましたが、医師が退院できると伝えても、喜ぶ様子はありませんでした。

改めて強い不安を感じた医師らは、再度「虐待対応チーム」で話し合うことを決めました。再び開かれた話し合い

ではさらに踏み込んだ議論が行われました。

「地元自治体の福祉課に確認しても、連絡が付かない状態が多い」

ソーシャルワーカーは追加の情報を報告しました。そして「直ちに家庭に戻すことには不安が残る」と総合的に判断。児童相談所に報告しました。

赤ちゃんはすっかり元気になっていましたが、次の受け入れ先との調整などに時間がかかり、その後も6日間入院を続けざるを得ませんでした。

こうした“虐待入院”が病院側に与える弊害も無視できません。埼玉県立小児医療センターは地域の拠点病院として県内全域から多くの重症な子どもたちが運ばれてきます。集中治療室や高度治療室の病床は常にほぼ満床です。治療が終わった子どもが数日でも長く入院することで、治療が必要な子どもに医療が施せない事態につながりかねません。過去に

はベッドに空きがなく、受け入れを断ったこともあったといいます。植田育也医師は「なるべく受け入れを断りたくないで、夜中でも子どもを集中治療室から病棟に移すなどの対応を取らざるを得ません。治療が終わった子どもはしっかりと生活できる場所に移ることがその子のためにもなるはずですよ」と話していました。



### “虐待入院”の理不尽さ

一方、“虐待入院”の厳しい現実には実際に体験した子どもたち取材してみるとより具体的に浮かび上がります。

今回、取材した別の病院では虐待で保護された赤ちゃんが回復したあとも受け入れ先の乳児院や里親が見つからず、半年近く、病院で暮らしていました。食事や入浴など限られた時間以外はほとんど1人で過ごして

いる赤ちゃん。

担当の医師は「まもなく1歳になるのにひとりで座ることもできず、心と体の発達の遅れが心配です」と入院が長期に及ぶことで発育に影響が出ることを懸念しています。

また、親からの虐待が原因で入院し、4か月間病院から出られなかった経験がある女性が当時の気持ちについて手記を寄せてくれました。

「誰も助けてくれない毎日の中での入院となり、救われたと思ってました」

「学校には行けないので、授業の遅れの不安があったけど教えてくれる人はいません。ずっとそばにいてくれる人もいません。遊んでくれる人も毎日ゆっくり話を聞いてくれる人もいません」

「本当に本当に、寂しかったの一言です」

“子ども憲章”にも違反？

子どもの入院をめぐっては病気の子どもの支援などを行うヨーロッパや日本の17の団体で作る協会がおよそ30年前に合意した「病院の子ども憲章」があります。

▽家庭的な環境がない病院での必要のない入院は子どもが健全に成長する権利を侵害するもので、避けなければならない

▽入院が避けられない場合でも子どもは親に代わる適切な保護者に付き添ってもらい、ケアを受ける権利があります。



NHKの報道の翌日、塩崎厚生労働大臣は実態調査を行った上で対策を検討することを明らかにしました。「子どもが健全に育つ権利を守るためにも、子どもにいちばんあった養育を実現したい」と述べ、里親への委託や、特別養子縁組などの取り組みを進めていく考えも示しました。

国が実態把握に動くことは問題解決の一步です。しかし、今も病院で苦し

んでいる子どもたちが大勢います。こうした子どもたちを1人でも減らすために私たちは今後も取材を続けていきます。

特設サイト「退院できない子どもたち」ではこれまでのニュースや動画をご覧いただけます。ご意見や体験談も募集しています。

## 老人ホーム元職員暴行は「虐待」 不自然な骨折に富岡市検討会認定

産経新聞 2017年7月29日

富岡市星田の老人ホーム「ウェルネステラス富岡」で、入所者が元職員に暴行され、けがを負った事件で、同市は虐待の有無を判断する検討会を27日に開き、虐待を認定した。

この事件では入所女性＝当時（84）＝の顔を殴り、全治30日の重傷を負わせたとして傷害の疑いで、同市南蛇井の無職、神戸佑介被告（30）が逮捕、起訴されている。認定の根拠として市は、（1）寝たきりの高齢者にとって不自然な骨折が確認され、刑事事件として立件された（2）ベッドの周りを柵で囲むなど、経緯の確認できない身体拘束があった一などとしている。

同市は今後、高齢者施設などを対象に研修会を開き、再発防止を徹底する。

## キレル高齢者増えた？その訳は……



NHK ニュース 2017年7月28日

「キレル高齢者」。ここ最近見たり聞いたりすることが増えています。タバコのポイ捨てを注意されて小学生の首を絞める、荷物が当たったという理由で高校生の顔を殴るなど高齢者が逮捕される事件も相次いでいます。キレル高齢者は増えているのでしょうか？（ネットワーク報道部 菅野彰彦 記者）

投稿相次ぐ“目撃談”

病院の会計でキレル高齢者見た

酒買って年齢確認ボタン押すことにキレル老人……

バス停以外のところで無理やりバス止めて乗ってくる

S N S  
でしば  
しば見  
るつぶ  
やき。  
「病院  
で会計  
が遅い  
とって  
キレ  
ていた」

「コンビニのレジで年齢確認ボタンを押すのにキレて商品投げつけて帰って行った」「停留所でもないのに無理やりバスを止めて乗ってきて遅いといっていた」「店で『品切れです』

と謝ったのにどなられた」などなど。どれも人生のベテラン、酸いも甘いもかみ分けた“いい大人”が突然怒り出したという投稿です。

### カッとなるのは年のせい？

カッとなって怒りだし感情を理性でコントロールできなくなる状態、高齢者に多いのか？

それには医学的な理由があります。都内の精神科に通っている83歳の男性患者は1年ほど前から気に入ら



ないことがあると妻に暴言を浴びせたり暴力を振るったりするようになりました。きちょうめんな性格ですが短気ではなかったといいます。診察を受けた結果、脳機能の低下と診断されました。

東京・中野区にある「あしかりクリニック」の院長で精神科の芦刈伊世子医師によると、人の理性は脳の前頭葉という部分で制御されていますが、この機能が低下するとこうした症状が出ることもあるといいます。

芦刈医師は「前頭葉が萎縮するのは認知症の1つで、記憶力などに問題はないが**脳機能が低下することで感情の抑えが効かなくなって我慢ができない状態になる。早い人では60歳ぐらいから症状が出始める**」と指摘します。

すべての人に症状が出る訳ではないものの、診察に訪れる高齢者で同様の症状が確認される人は少なくないということです。



### 自暴自棄で犯罪も増加？

理性による制御が利かなくなり犯罪にまでエスカレートするケースもあります。

法務省の犯罪白書によると、おとし刑法犯で検挙された65歳以上の高齢者は4万7632人。平成元年に比べて7倍以上に増えています。高齢人口そのものが増えているため単純な比較はできませんが、65歳以上の人口

10万人あたりの「割合」で見ても、3倍以上に増加していることがわかりました。特にここ最近、ごく普通の生活を送ってきた人が自暴自棄になって周囲を巻き込んだと見られる事件が相次いでいます。

▽71歳の男が東海道新幹線の車内でガソリンをかぶって火をつけて自殺し、乗客の女性が巻き添えで死亡（おとし6月）

▽68歳の男が東京・杉並区で夏祭りの会場に火炎瓶を投げつけて16人がけが。男は直後に自殺（去年8月）

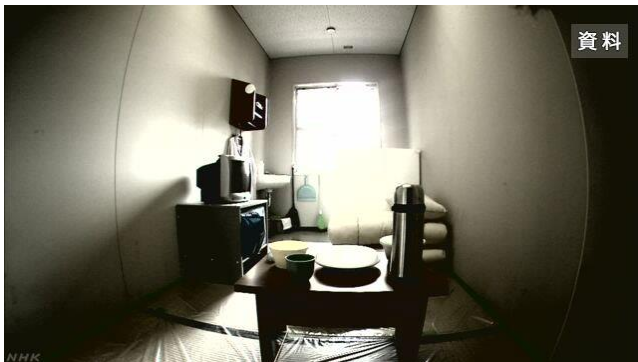
▽72歳の元自衛官が宇都宮市の公園で死亡。手製の爆発物を使用した自殺と見られ、本人のものと見られるブログなどに「自暴自棄に陥っている」の書き込み（去年10月）

宇都宮で起きた爆発事件（去年10月）

### ヒント求めて刑務所へ

感情をコントロールできなくなるのは加齢による脳機能の変化や性格の問題なのか。

ほかの理由を探るため、キレて犯罪に関わってしまったという受刑者に話を聞きに行きました。訪ねたのは初犯の受刑者が多く収容されている西日本のある刑務所。70代の受



刑者から話を聞くことができました。この受刑者は工業高校を卒業したあと26歳の時、大阪で就職しました。当時は残業があると泊まり込むなどプライベートを顧みず仕事に打ち込んだといいます。客から感謝されることに喜びを感じ、その後、職はかわりましたが仕事には常にやりがいを感じていたと話します。

ところが50代半ばの時、リストラに近い形で退職を余儀なくされます。ほ

かの職を探しましたが60近い年齢が大きな妨げとなりました。貯金も尽き、新たな仕事も見つからず「やけくそになった」。

そんなある日、近所のコンビニエンスストアに押し入り、刃物で店員を脅して現金約20万円を奪いました。その後逮捕、起訴されて懲役8年の判決を受けて服役しました。当時の心境について「捕まるのは分かっていた。なぜあんなことをしたのかわからない」と話していました。

### “仕事一筋”が身を滅ぼす

このほか放火や殺人未遂の罪などで服役している受刑者や刑期を終えて刑務所を出た人など4人から話を聞くと、ある2つの共通の要因が見つかりました。

#### (共通点1・“仕事人間”)

一つ目は全員が仕事を生きがいとする「仕事人間」だったことです。4人とも「仕事は楽しかった。生きがいであった」と口々に話しました。「団塊の世代」など今の70歳前後の人たちは「モーレツ社員」とも呼ばれて日本の高度経済成長を支え続けてきました。それだけに仕事を失った時の喪失感が深く大きかったように感じました。

#### (共通点2・自信と誇り)

二つ目は自分の生き方に強い自信や誇りを持っていることです。過去の成功体験にこだわるあまり、年を重ねてからの挫折を受け入れられず、苦境に立たされた時も周囲の目も気にして誰にも相談できなかつたと話していました。

受刑者の1人が「仕事を失ったことで『これをやってはいけない』という自分の中のハードルが下がってしまった。『仕事を続けていれば』『家族がいてくれたら』という思いはある」と振り返っていたのが印象的でした。

### 社会や家族との絆を絶やさない

こうした、いわば「社会的な孤立」について、犯罪学が専門の龍谷大学法学部の浜井浩一教授は高齢者がキレることと関係していると考えています。

浜井教授は「70歳前後の世代は仕事が自己実現の場であった人が多く、会社を退職すると社会とのつながりが希薄になっていく。日本で犯罪を



抑止しているのはモラルより同僚や上司、それに部下といった周りの目を意識した相互チェックであり、社会とのつながりが弱くなれば秩序の維持が難しくなって、キレたり事件を起こしたりしてしまうことにつながる」と分析しています。

今、日本の平均寿命は男女とも80歳を超えて過去最高となっています。定年で勤め先を辞めたあと20年、30年と暮らすのが当たり前となりつつあります。そうした中、加齢による脳機能の低下を完全に防ぐのは困難です。また“仕事一筋”で生きてきた男性が子どもが独立し、夫婦だけとなった家庭で孤立してしまうといった話もよく聞きます。誰しも年をとることは避けられません。「加齢による変化」があることを自覚したうえで、日常生活の中で何か不快なことがあっても一拍置き、相手の身になって考える余裕が必要なのかも知れません。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

